

# 大井川上流の自然を学び、守る 「南アルプスの森づくりツアー」

令和3年10月30日、31日に初めて開催された「南アルプスの森づくりツアー」に、市内在住の小学生と保護者20人が参加しました。1日目は井川まちあるきガイドの方と、井川神社や龍泉院、門間の地藏堂など井川本村を散策。ヤマメ祭りなどの伝統文化の解説に、参加者は熱心に耳を傾けていました。その後、約2時間かけて南アルプスの麓へ移動、昨年稼働したウイスキー蒸溜所や、南アルプスを愛した白旗史朗氏の写真を見学しました。また、静岡大学の増澤武弘教授からの助言のもと、参加者はミズナラやブナのドングリ拾いに熱中しました。2日目は標高1571mの鳥森山でドングリ拾い。しかし、2週間前にたくさんあったドングリが減っていました。増澤教授によると、森の動物たちがドングリを食べてしまったとのこと。しかし、動物の糞が、土の中の微生物の餌となり豊かな土壌を作り、木々が成長するという、生きものつながり「生態系」になっていることを教えてくれました。



井川神社でガイドさんからお話に集中



大人も子どももミズナラやブナのドングリ拾いに夢中



拾ったドングリを丁寧にポットに植える

# 南アルプスの 大自然に感動！

令和3年11月2日、井川小中学校は、今年度進めてきた環境教育の集大成として、南アルプスの麓にある二軒小屋や樫島口を訪れました。現地では、静岡大学の増澤武弘教授や、十山株式会社 鈴木康平社長から、自然の中で工夫しながら力強く生きている木々の生態や森の営みについてお話をいただき、自然観察を行いました。生徒たちは、赤石ダムや



増澤教授のお話を熱心に聞きます

また、この日に木賊で拾ったミズナラのドングリを学校に持ち帰り、子ども園の園児たちとポットに植え替えました。南アルプスを大切に思うバトンは、井川の地で、中学生から園児たちへと着実につながっています。井川小中学校では、今後も南アルプスの麓に位置する井川の自然を中心とした環境教育をさらに進めていきます。

こんなにきれいなわき水がたくさんでていることに驚きました。また、この水を利用して、南アルプスの自然の素晴らしさを伝えようとしている人たちがいることを知りました。(井川小中8年 海野要)



井川蒸溜所の湧水(写真左下)を見て驚く生徒



井川小中学校の生徒たち



ミズナラのドングリを一生懸命拾います

# いかわね昆虫博士が 交流しました！



(写真左)資料館やまびこの鈴木正文さん (写真右)井川小中学校の仁藤展輝校長

いかわねの昆虫博士である井川小中学校の仁藤展輝校長先生と資料館やまびこの鈴木正文さんが資料館やまびこで昆虫交流をしました。同施設には、いろいろな昆虫の標本が展示されており、好きな昆虫の標本を見つけては、様々な話題で盛り上がりしました。井川地域は標高の低い場所から高山帯に生息する昆虫が入り混じり、中山間地域で見られる種類が多産するという特徴があるそうです。一方、川根本町には、それぞれの昆虫たちの食草となる植物の種類が豊富なため、井川同様、様々な昆虫が見られるようです。これは、いかわねの自然が豊かである証拠だそうです。



標本や参考文献を見ながら交流

最近、地球温暖化などの影響によって、昆虫の種類は減少し、暖かい地域でしか見ることができなかつた昆虫をいかわねでも見かけるようになったそうです。自然を守り、いつまでも昆虫を見ることができるといかわねであって欲しいと思います。

# いかわねでつながる交流

令和3年11月24日、本川根中学校の生徒(本中生)が井川小中学校を訪れ、初めて対面での交流活動を実施しました。

午前中は、両校生徒が、今年一年かけて進めてきた総合的な学習の時間の研究成果を、互いに発表し合いました。本中生の研究の中には、井川と川根本町を比較したテーマも多く、「なるほど!」と思わずうなずいてしまうような発表が多くありました。また、午後は、井川中生が部活動で取り組んでいるバドミントンを、



バドミントンと一緒に汗を流しました

本中生と一緒にを行いました。井川中生が本中生にやさしくアドバイスをする場面も見られ、和やかな雰囲気の中で、楽しく交流ができました。



本川根中学校と井川小中学校の生徒たち

川根本町、井川、それぞれの「ひと・もの・こと」の良さをお互いを感じる事ができた素晴らしい時間でした。次年度以降も交流活動を続けていきたいです。

# 「いかわね」の人々 Vol.16 山口 真里奈

「いかわね新聞」のデザインのお手伝いをしていただいた山口です。今回の発刊を最後に卒業させていたのですが、最後にこのような場をもうけていただきありがとうございます。妊娠6ヶ月の頃、夫の転勤により井川へ転居し約2年半半生活していましたが、初めての出産と育児



7年前の井川小学校にて

を、井川の暖かい方々に囲まれてのんびりした時間の中で子育てが出来たことは良い思い出となっています。最初にデザイナーのお声がかかった時はとても嬉しくて、大好きな「いかわね」のこともっと県内の方々に知ってほしい。また、井川と川根の交流のお手伝いができればと思いつながら編集に携わっていました。井川を離れてからも続けさせてもらい、当時赤ちゃんだった息子は7歳になりました。「いかわね」の原稿をいただく度に、暮らしていた頃を思い出して懐かしさを感じていました。これからも末長く「いかわね新聞」が地域のつながりとして発展していきますように。応援しています。



子どもたちもこんなに大きくなりました